

阿蘇乙姫の豪雨 「千年に一度」 山口大教授解析

2012.07.16 10:25 日刊紙

阿蘇地域を12日に襲った「これまで経験したことのないような大雨」は、カルデラ特有の地形で阿蘇谷に集中。阿蘇市乙姫の午前1～7時の雨量は「千年に一度」の歴史的豪雨だったことが、山本晴彦・山口大農学部教授(気象防災学)の解析で分かった。

山本教授は、熊本地方気象台と県内の地域気象観測システム(アメダス)、国土交通省、県の雨量計など計300カ所以上のデータから雨量分布を解析。

その結果、12日午前0時から15時間の総雨量が400ミリを超えた地域は、北外輪山と阿蘇五岳に囲まれる阿蘇谷とほぼ重なる南北10キロ、東西30キロの地域に限られた。

南西の風で阿蘇谷に運ばれた湿った空気が、標高約800メートルの外輪山の内側で集中して積乱雲となって発達した「地形性豪雨」だという。高森町など南郷谷は300～150ミリにとどまった。

特に、阿蘇市乙姫の午前1時から6時間の雨量は459・5ミリと、同日の雨量(493ミリ)のほとんどが集中。「957・1年に一度」の雨量と算出されるという。

山本教授は「豪雨が起こる地形的な仕組みを理解し、防災対策を見直すべきだ」と指摘している。

